



## Osaka Gakuin University Repository

Title	LI 構文の派生とその理論的帰結 (1) The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 1
Author(s)	川本 裕未 (Yumi Kawamoto)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 77 号 : 17-34
Issue Date	2019.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# LI 構文の派生とその理論的帰結 (1)

川 本 裕 未

## 1. LI 構文

以下の (1a-c) のように、場所を表す構成素が前置されるとともに、意味上の主語が動詞に後続する文を場所句倒置 (Locative Inversion、以降 LI) 構文と呼ぶ。

- (1) a. Down the hill rolled the baby carriage.  
b. From inside the house came a loud scream.  
c. On the stage appeared the famous singer.

LI 構文の派生をめぐっては主に、場所句が SPEC-T に前置されているとする考え方 (Hoekstra and Mulder (1990)、Collins (1997) 等) と、話題化された場所句が SPEC-C に移動しているという考え方 (Bowers (1976)、Newmeyer (1987)、Coopmans (1989)、Rochemont and Culicover (1990) 等) がある。本稿では、これらの先行研究を参考にしながら、LI によって前置された場所句や動詞の後ろに位置する名詞句の統語的特性を検討し、そして、Chomsky (2007) および Chomsky (2008) の枠組みのもとで、Rizzi (1997) の left periphery のアプローチを採用し、LI 構文の構造とその派生について考察する。

第2節でまず LI によって前置された場所句の特性を詳しく観察することによって、場所句がどこに前置されているのかについて検討する。第3節では Rizzi (1997) によって提案された文の left periphery、つまり TP の左側に来

る投射について概観し、LI によって前置された場所句の到達点について議論する。第4節では、第2節および第3節で結論づけた LI 構文の場所句の移動過程が正しいなら、第2節で挙げられた LI 構文の場所句のさまざまな特性を極小理論の枠組みで正しく捉えることができることを示す。続く第5節では、LI によって前置された場所句が付加詞ではなく、項であることを示す証拠を確認し、項である場所句を持つ文の構造として VP-LOC の存在を提案し、それにしたがって、非能格動詞文、他動詞文、非対格動詞文の各文の構造を提案する。続く第6節では、Chomsky (2000、2001) における probe-goal 関係に基づく Agree やフェーズの概念を導入し、Chomsky (2007、2008) における統語操作の parallel application のもとで、LI 構文がどのように派生されるのかを具体的に見ていく。次の第7節では LI 構文にも触れながら虚辞の *there* を中心に、非対格動詞文においては *there* 構文や LI 構文の派生が可能であるのに対して、なぜ非対格動詞用法の能格動詞文ではそれが不可能なのかについて検討を加える。さらに、一般に *there* 構文や LI 構文の派生を許さないとされる他動詞文や非能格文のなかに、こういった構文を容認するものがある事実について議論し、本稿で提案された非能格動詞文、他動詞文、非対格動詞文の各文の構造から、その事実が自然に導き出されることを示す。尚、本稿は4回に分けて連載する予定である。第1回の今回は第2節までをカバーする。

## 2. 前置された場所句の位置

LI の適用は (1a-c) のような非対格動詞文、および (2a-b) のような受動態のように、外項を持たない構文においてのみ観察され、(3a-b) のような他動詞や (4a-b) のような非能格動詞を用いた文のように、外項を持った構文では LI は適用できない。<sup>1</sup>

- (2) a. In the backyard was found the child.  
 b. On the stage has been placed a grand piano.

- (3) a.\*To the party carried the man a bottle of wine.  
 b.\*Down the hill threw the man some stones.
- (4) a.\*On the stage sang a world-famous singer.  
 b.\*In the living room slept the man.

非対格動詞文、および受動構文は一般に (5) のような構造をしていると考えられており、例えば (6a-c) のような文は、(7a-c) のように、内項、すなわち VP 内の DP が SPEC-T に移動をすることによって派生される。

- (5) [TP T [<sub>VP</sub> v [<sub>VP</sub> V DP ... ]]]
- (6) a. The baby carriage rolled down the hill.  
 b. The famous singer appeared on the stage.  
 c. A loud scream was heard from the house.
- (7) a. The baby carriage<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> rolled ~~the baby carriage<sub>i</sub>~~ down the hill].<sup>2</sup>  
 b. The famous singer<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> appeared ~~the famous singer<sub>i</sub>~~ on the stage].  
 c. A loud scream<sub>i</sub> was [<sub>VP</sub> heard ~~a loud scream<sub>i</sub>~~ from the house].

英語においては顕在的統語部門で V は v まで上昇するが、T までは上昇しないと考えられており (Pollock 1989)、そうであれば、LI が適用された (1a-e) や (2a-b) では内項は動詞の後ろに位置していることから、VP 内に留まっていると考えられる。英語において定形の T は EPP 素性を持っており、その指定部を何らかの要素で埋める必要があるが、(1a-c) や (2a-b) では内項は VP 内にとどまっており、SPEC-T に位置しているとは考えられない。では、SPEC-T を埋めて T の持つ EPP 素性を満足させているものは何であろうか。

次の第2.1節では、前置された場所句が SPEC-T を埋めていることを示すいくつかの証拠を挙げる。

## 2.1 主語との共通性

本節では、LI 構文における前置された場所句が主語と同様の特性を持つことを示す例をいくつか見る。まず、LI 構文を付加疑問文にした場合、tag 部分の主語として用いられるのは **there** であり、内項の名詞句を代名詞化したものを用いると非文になる。

- (8) a. In the garden is a beautiful statue, isn't there/\*isn't it?  
 b. In the ocean are whales, aren't there/\*aren't they?

(Bowers 1976)

このことから、(8a-b) の主節 (tag の前の部分) では a beautiful statue や whales が統語的な主語の役割を果たしておらず、代わりに場所句 PP の in the garden や in the ocean が統語的な主語となっており、tag においてその場所句を代用表現化した **there** が使用されていると考えられる。<sup>3</sup>

主語と目的語はいくつかの点で統語的な非対称性を示すことが指摘されている。まず、Do-support に関して主語と目的語では非対称性が観察される。主語 DP を疑問詞を含む表現にして wh 疑問文を作った場合 Do-support が起らない。

- (9) a.\*Which player did win the game? (did は無強勢)  
 b.\*Did which player win the game?  
 c. Which player won the game?

(9a) は did に強勢を置き、動詞句 win the game を強調する強調助動詞としての解釈であれば容認可能であるが、did に強勢を置かず、強調の解釈ではなく中立的な疑問文の解釈をすることはできない。そして which player が文頭に来ていない (9b) も非文である。中立的な did の解釈として許されるのは Do-

support が適用されていない (9c) だけである。一方、目的語を wh 疑問詞化した (10a-c) では、Do-support を適用した (10a-b) のうち (10a) は容認可能であるが、(10b) は非文である。さらに、Do-support を適用しない (10c) も非文である。

- (10) a. Which player did Naomi Osaka defeat?  
 b.\*Did which player Naomi Osaka defeat?  
 c.\* Which player Naomi Osaka defeated?

そして、LI 構文では場所句を疑問詞を含む表現にして wh 疑問文を作った場合、主語と同様に Do-support が起こらない。

- (11) a.\*On which stage did appear the famous singer? (did は無強勢)  
 b.\*Did on which stage appear the famous singer?  
 c. On which stage appeared the famous singer?

このように、LI 構文の場所句は疑問詞化をした場合 Do-support を引き起こさないという点に関して主語と同じ特性を示すのである。

また、主語と目的語の非対称性として、that・痕跡効果も挙げるができる。(12a-d) に見られるように、動詞句補文内からの抜き取りに関して、主語と目的語で文法性に違いが認められる。(12a-b) が示すように目的語を補文から抜き取るのは、補文標識の有無にかかわらず可能であるのに対して、(12d) が示すように補文主語の補文からの抜き取りは補文標識があると許されない。

- (12) a. Who do you think John saw?  
 b. Who do you think that John saw?  
 c. Who do you think saw Mary?

d.\* Who do you think that saw Mary?

一方、LI 構文は (13a) および (13c) が示すように、定形節補文から場所句を抜き取り、主節に移動させることは可能であるが、(13b) および (13d) が示すように、補文標識があると場所句を補文内から主節に移動させることはできない。

(13) a. Into the room Terry claims walked a bunch of gorillas.<sup>4</sup>

b.\*Into the room Terry claims that walked a bunch of gorillas.

c. Into which room does Terry claim walked that bunch of gorillas?

d.\* Into which room does Terry claim that walked that bunch of gorillas?

(Culicover and Levine 2001)

つまり、(12d) において補文標識の *that* があると、補文主語、すなわち補文 SPEC-T にあった *who* を文頭の主節 SPEC-C に移動させることができないのと同様に、LI 構文の場所句は補文標識の *that* があると、補文から出て文頭に移動することは許されないのである。

さらに、数量詞や *wh* 句のような論理演算子の作用域に関しても、主語と目的語の非対称性が観察される。目的語が *wh* 演算子になっている (14a) は(14b) と (14c) の2通りの答え方が可能である。

(14) a. Who does everyone love?

b. Everyone loves Mary.

c. John loves Mary, Bill loves Jane, and Tom loves Cathy.

(14b) は (14a) において *who* が *everyone* より広い作用域を持つ場合の答えであり、(14c) は (14a) において *everyone* が *who* より広い作用域を持つ場合の

答えである。一方、次の (15a) は (15b) の答えは可能であるが、(15c) の答え方はできない。

- (15) a. Who loves everyone?  
 b. John loves everyone.  
 c.\* John loves Mary, Bill loves Jane, and Tom loves Cathy.

つまり、主語が wh 句演算子になっている (15a) では who が広い作用域を持つ解釈のみが許され、everyone が広い作用域を持つ解釈はできないのである。

LI 構文の場所句は、主語が wh 演算子となっている (15a) と同様に、一通りの解釈しか許さない。

- (16) a. Some letter was lying in every pigeonhole.  
 b. In some pigeonhole was lying every letter.

(Den Dikken 2006)

(16a) では以下のように some と every のそれぞれが広い領域を持つ解釈が可能であるが、

- (17) a. There is some letter  $x$  such that  $x$  was lying in every pigeonhole.  
 (some>every)  
 b. For every  $y$ ,  $y$  a pigeonhole, some letter was lying in  $y$ .  
 (every>some)

LI が適用された (16b) では場所句にある some が広い領域を持つ解釈の (18a) しか許されない。



- (18) a. There is some pigeonhole  $y$  such that every letter was lying in  $y$ .  
 (some>every)
- b. \*For every  $x$ ,  $x$  a letter,  $x$  was lying in some pigeonhole.  
 (every>some)

このように、数量詞や *wh* 句のような論理演算子の作用域に関しても、LI 構文の場所句は主語と同じ特性を示すのである。

以上、本節では LI 構文において前置された場所句は、付加疑問文の *tag* 部分に *there* 主語をとること、*Do-support* を受けないこと、*that*・痕跡効果を示すこと、そして数量詞および論理演算詞の作用域に偏りがあることを示した。これらの事象はいずれも主語、つまり SPEC-T に位置する構成素と同じ特性を示すものであり、これらのことから LI 構文の場所句は派生のある段階で SPEC-T に位置すると考えられる。

さらに、LI 構文の場所句は主節 SPEC-T への長距離移動も可能である。繰り上げ動詞を用いた次の (19a-b) は (20a-b) に示されるように LI によって場所句が非定形節補文から主節に繰り上がり、主節の SPEC-T に移動している。

- (19) a. Over my windowsill seems to have crawled an entire army of ants.  
 b. On the hill appears to be located a cathedral.  
 (Bresnan 1994)
- (20) a. Over my windowsill<sub>i</sub> seems ~~over my windowsill<sub>i</sub>~~ to have crawled an entire army of ants ~~over my windowsill<sub>i</sub>~~.  
 b. On the hill<sub>i</sub> appears ~~on the hill<sub>i</sub>~~ to be located a cathedral ~~on the hill<sub>i</sub>~~.

(19a-b) は SPEC-T を埋める要素は DP だけでなく、PP でも可能であるということも示唆しており、<sup>5</sup> LI 構文において SPEC-T を埋めて T の持つ EPP 特性を満足させているものは前置された場所句であると結論づけることができる。



gargoyle.

- c.\*That over the entrance should hang the gargoyle was written in the plans.

(Hooper and Thompson 1973)

話題化も補文内での適用は可能であるが、主語節内では適用できず、この点でも LI が適用可能な環境と話題化の可能な環境が一致する。

- (26) a. It was decided that this building, it would be demolished.

b.\*That this building, it would be demolished was decided.

(Hooper and Thompson 1973)

LI 構文と話題化のこれらの共通性は、LI によって前置された場所句が一種の話題要素となっていることを示唆している。もし、そうであれば、LI 構文において前置された場所句は話題化された要素と同様に、TP の外側へ A-bar 移動していることになる。以下の ECM 動詞を用いた例文がこのことを裏付ける。

- (27) \*I expect on this wall to be hung a picture of Leonard Pabbs.

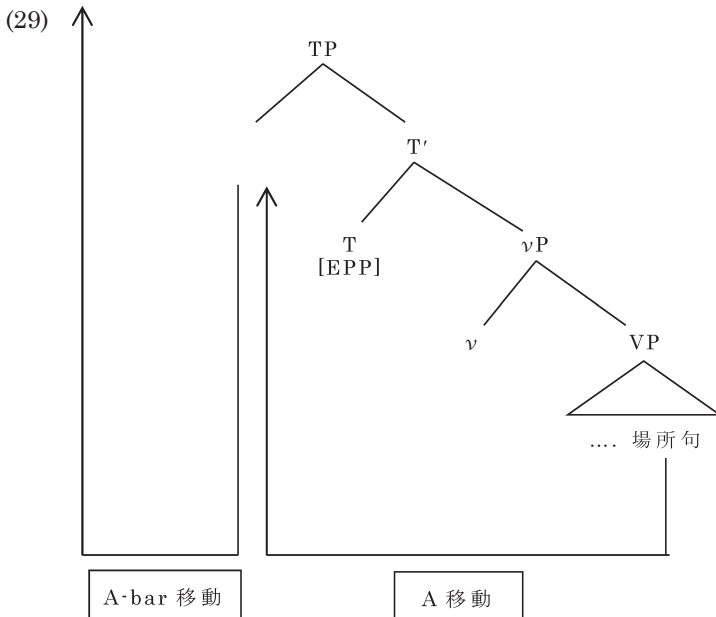
(Bresnan 1994)

もし LI 構文において場所句が元位置から SPEC-T に移動し、そこに留まることができるのであれば、(27) の on this wall は補文 SPEC-T に留まることができて、(27) は適格文になるはずである。しかし、(27) が非文ということは、LI 構文の場所句は SPEC-T に移動したあと、次に TP の外へ A-bar 移動しなくてはならないことを示している。CP を欠いた不完全な (defective) TP である ECM 補文は、LI が適用された場所句に A-bar 移動の着地点を提供す

ることができないため、(27) は不適格になると考えられる。同じ理由で、ECM 補文内での話題化は許されない。

- (28) a. \*Mary believes to John, Bill to have showed the map.  
 b. Mary believes that to John, Bill showed the map.

以上の事柄をまとめると、2.1節で挙げた例文は LI 構文における場所句が SPEC-T に位置していることを示す一方で、2.2節で挙げた例文 は LI 構文の場所句が TP の外側、つまり CP に位置していることを示している。これらの事実から、LI 構文における場所句はまず SPEC-T に A 移動し、T の持つ EPP 素性を満足させ、その後 TP の外側へ A-bar 移動しているということが導き出される。



LI 構文の場所句と話題化された構成素は TP の外側に A-bar 移動するという点で共通しているが、LI 構文の場所句がいったん SPEC-T に A 移動してから A-bar 移動するのに対して、話題化は直接 TP の外側に A-bar 移動する。その移動の仕方の違いから文法性の差異が生まれるのが次の弱交差の例である。

- (30) a. ?\*Who<sub>i</sub> does his<sub>i</sub> mother like t<sub>i</sub>?  
 b. Who<sub>i</sub> appears to his<sub>i</sub> mother [t<sub>i</sub> to be a genius]?

(30a) は、wh 句が、それが束縛する代名詞を越えて SPEC-C に A-bar 移動することができないことを示す典型的な弱交差の例である。それに対して、wh 句が一旦 SPEC-T に A 移動してから SPEC-C に A-bar 移動をしている (30b) は文法的である。

- (31) a. ?\*Who<sub>i</sub> does [his<sub>i</sub> mother like who<sub>i</sub>]?  
 b. Who<sub>i</sub> [who<sub>i</sub> appears to his<sub>i</sub> mother [who<sub>i</sub> to be a genius]]?

同様のコントラストが話題化文の (32a) と LI 構文の (32b) の間に観察される。

- (32) a. \*Into every dog<sub>i</sub>'s cage, its<sub>i</sub> owner peered.  
 b. Into every dog<sub>i</sub>'s cage peered its<sub>i</sub> owner.

(Culicover and Levine 2001)

話題化文の (32a) が非文であるのに対して LI 構文の (32b) が適格文である事実は、話題化文は (31a) のように SPEC-T を経由することなく、直接 SPEC-C に移動しているのに対し、LI 構文の場所句は (31b) のように一旦 SPEC-T に入った後に SPEC-C に移動していることを示唆するものである。

- (33) a. \*Into every dog<sub>i</sub>'s cage, [its<sub>i</sub> owner peered into every dog<sub>i</sub>'s cage].  
 b. Into every dog<sub>i</sub>'s cage [~~into every dog<sub>i</sub>'s cage~~ peered its<sub>i</sub> owner into every dog<sub>i</sub>'s cage].

(「LI 構文の派生とその理論的帰結 (2)」に続く)

### 注

- 1 しかしながら、一部の非能格動詞の中には LI を許すもの、さらに一部の非対格動詞の中には LI を許さないものがあることも指摘されている。
- (i) a. From this pulpit preached no less a person than Cotton Mather.  
 (Bolinger 1977)  
 b. On the third floor worked two young women called Maryanne Thomson and Ava Brent, who ran the audio library and the print room.  
 (Levin and Rappaport 1995)
- (ii) a. \*On the top floor of the skyscraper broke many windows.  
 b. \*On the streets of Chicago melted a lot of snow.  
 (Levin and Rappaport 1995)

これらの文のなかで、(iia-b) の能格動詞の非対格動詞用法が LI 構文を許さない事に関しては第5節で、(ia-b) の非能格動詞が LI 構文を許容することについては第7.2節で議論する。

- 2 動詞句内に融合した構成素がその後移動をする際に残したコピー、V-to-*v* 移動、V-to-*v* 移動の際に形成される付加構造等、ここでの議論に関係のない派生過程の表記は省略している。議論の単純化のため、今後も当該議論

に直接関係のない派生の過程は省略する場合がある。

- 3 Postal (2004) は、音声的に空である虚辞 *there* が (1b) の SPEC-T に位置していると主張する。
- 4 (13a-d) は非能格動詞 *walk* を用いた LI 構文である。第7.2節も参照されたい。
- 5 Grimshaw (2000) は、nominal の拡大投射 (extended projection) として語彙範疇 N の上に機能範疇 D、そして最上位に機能範疇の P が来るとしている。そうであれば、PP が nominal として T の EPP を満足させることができるのは自然の帰結ということになる。
- 6 大文字表現は、焦点として強勢を置いて発音されることを示す。

#### 参考文献

- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.
- Bowers, John (1976) On Surface Structure Grammatical Relations and the Structure-Preserving Hypothesis. *Linguistic Analysis* 2: 225-242.
- Bresnan, Joan (1994) Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar. *Language* 70: 72-131.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by Phase. In: Michael Kenstowics (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2007) Approaching UG from Below. In: Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner (eds.) *Interfaces+Recursion=Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, 1-29.

- New York: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam (2008) On Phases. In: Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Collins, Chris (1997) *Local Economy*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Coopmans, Peter (1989) Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English. *Language* 65: 728-51.
- Culicover, Peter and Robert Levine (2001) Stylistic Inversion in English: a Reconsideration. *Natural Language and Linguistic Theory* 19: 283-310.
- Den Dikken, Marcel (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Grimshaw, Jane (2000) Extended Projection and Locality. In: Peter Coopmans, Martin Everaert and Jane Grimshaw (eds.) *Lexical Specification and Insertion*, 115-133. Amsterdam: John Benjamins.
- Hoekstra, Teun, and Ren Mulder (1990) Unergatives as Copular Verbs: Locational and Existential Predication. *The Linguistic Review* 7: 1-79.
- Hooper, Joan B. and Sandra A. Thompson (1973) On the Applicability of Root Transformations. *Linguistic Inquiry* 4: 465-497.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Newmeyer, Frederick J. (1987) Presentational *There*-Insertion and the Notions Root Transformation and Stylistic Rule. *Papers from the 23rd Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 295-308.
- Pollock, J.-Y. (1989) Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20: 365-424.
- Postal, Paul M. (2004) *Skeptical Linguistic Essays*, Oxford University Press, Oxford.



- Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Rochemont, Michael. and Peter Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schachter, Paul (1992) Comments on Bresnan and Kanerva's "Locative Inversion in Chichewa: A Case Study of Factorization in Grammar". In: Tim Stowell and Eric Wehrli (eds.) *Syntax and Semantics 26: Syntax and the Lexicon*, 103-116. New York: Academic Press.

# The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 1

Yumi Kawamoto

This whole article will be published in four volumes of *Foreign Linguistic and Literary Studies*. Part 1 in this volume discusses how sentences like the following are derived:

On the stage appeared the famous singer.

The above sentence is called the Locative Inversion construction (LIC), where the subject and verb are inverted and the locative phrase is fronted.

The LIC chooses *there* as the subject of the tag part of tag questions and it does not trigger Do-support. Moreover, the fronted locative phrase exhibits the same properties as subjects with reference to the subject-object asymmetry phenomena: being subject to the *that*-trace effect and the scope restriction on the interpretation of quantifiers and operators. All of these facts indicate that the fronted locative phrase lands on SPEC-T as subjects do.

On the other hand, the fronted locative phrase in the LIC and the fronted focused phrase in topicalization constructions share the same properties: they cannot carry new information, and they cannot be fronted either in the subject complement clause or the ECM complement. These facts suggest that the fronted locative phrase moves out of TP as topicalized

phrases do.

From these observations, we thus conclude that the fronted locative phrase first A-moves to SPEC-T and then A'-moves out of TP. The theoretical consequences of this conclusion will be discussed in the subsequent parts of this article.